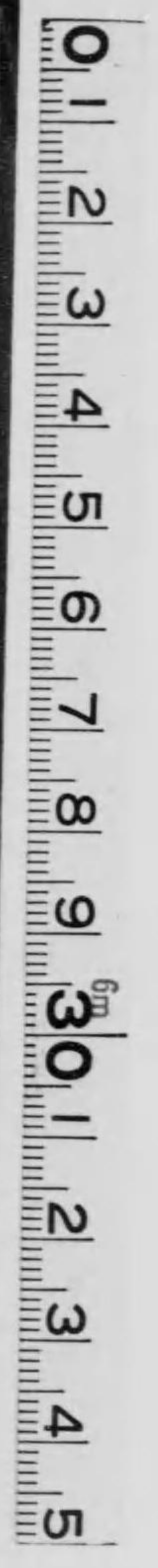


赤坂鑄工録 全

11
487



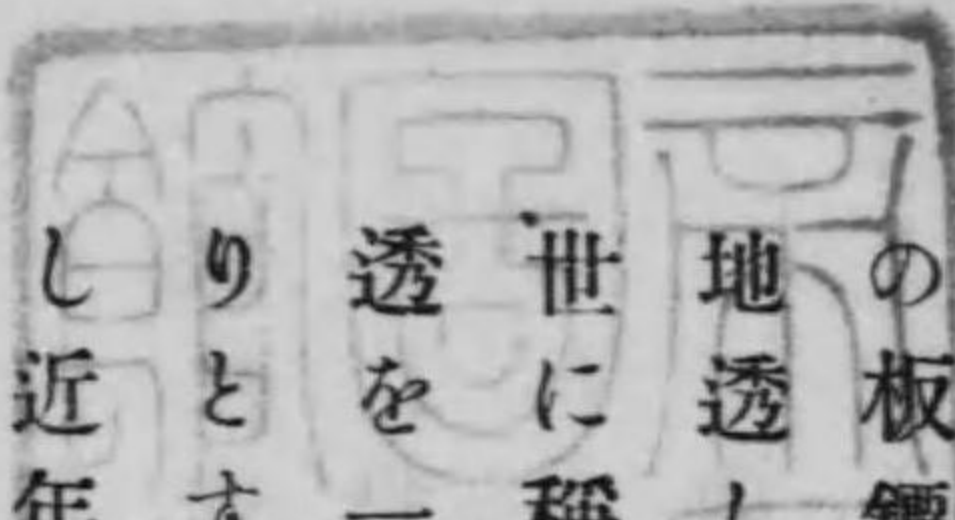
始



11-487

緒言

本邦鐔の起原の明らかならず中世刀匠甲冑師にて作られたる鐵の板鐔に少許の透しをなしたるもの足利義教將軍の創意により地透しをなすに至り平安城透一類興り又尾張にても作るに及び世に稱讚せられ廣く愛用せらる寛永の頃に至り此平安城透尾張透を一轉化し更に美化したるものは實に肥後鐔赤坂鐔の二派をりとし而して肥後一統は象嵌をなし傍透しをなしたるもの如し近年に至る迄同國の數寄者間には象嵌鐔に重きを置きたる證とするに足るべし赤坂派に於ては圖案意匠に重きを置き專念透しに没頭研究し一流を成すに至る此點は聊誇るに足るならんか秋山先生鐔界に遊ぶ事實に六十餘年老來益豪健にして一日も其



大正
10 9 7
内交

研究を怠らず造詣の深き比類なく斯道空前絶後の權威者なるは
天下遍く知る處なり由來赤坂鐔は土佐藩に愛玩賞用せられたる
ものにして赤坂鐔を知るもの同藩に過るものあらず秋山先生又
土佐藩に生れ傳統的に古人の談に又多年得られたる研究に今日
誠に赤坂鐔を知悉する人先生に勝るあらざるなり予此書を草す
るに就き先生に斧正を乞ひたるに校閲せられて更に一書を寄せ
られたり故に全文を掲げたり即白賁記とある者之れなり後段掲
ぐる處の圖様は秋山先生多年蒐集されたる押形より撰み模寫し
たるものなり其上代に於ける圖様非凡なる意匠は實に赤坂の面
目躍如たるを見るべし此書此圖を得て光彩を添ゆる事甚大なり
茲に謹で先生に懇切なる情誼を陳謝し併て鐔の會雜誌永田先生
の説に並に和田先生著本邦裝劍金工略誌に得る處多大なり又實

二

物研究資料としては齋藤榮寛主幹鐔の會に得る處尠なからず茲
に感謝の意を表す而して此書他日幸にも愛鐔家参考の一端にも
なるを得ば予の満足之れに過ぎずと爾云。

大正辛酉晩夏

五世網屋惣右衛門識

赤坂鐺 總論

四

赤坂鐺は徳川氏の初期元和寛永頃より始まりたるもの如し其何人の末流に出でたるや一の考證を得ず一説に初代忠正は肥後林又七の弟子と傳へらるれども年代より考ふれば疑ふべし其京師より移りて江戸赤坂に住し鐺を作りたるを以て赤坂鐺の稱あり一説には京都の道具屋に雁金屋彦兵衛なる者あり後江戸へ下り赤坂に住し鐺師庄右衛門を京都より召連れ來り自身下繪にて鐺を透させ拙なるを棄て良作のみを賣り出したるを以て名聲忽顯はると云ふ四代彦十郎忠時は此雁金屋彦兵衛の子にて鐺師となりたりと云ふ初二三代共に銘を刻まず而して此三代迄の作風は尾張透鐺に似たるものなれども其圖様を異にせり四代以下は

在銘多く肥後春日派の鐺に酷似したるものあり其何れより近づきたるか知り難けれども八ツ橋鶴の丸等其他同圖のものあり只赤坂は模様つなぎの箇處太く毛彫手強く耳丸く櫃穴大にして一種の特徴あり又京大五郎鐺に類似のものあり又後代の物には板鐺に布目象嵌をなしたるもあり而して初二三代迄は古雅にして優美なるものにして四代以下巧手にして艶麗なるものなり又之を模したる粗品少からず世に傳はるものあり以て此一家の如何に繁榮なりしかを知るを得べし。

金工鐺寄に田中一賀曰く赤坂鐺の鍛ひ地金につとりとうるをひ有色々の透模様にて兩櫃を用ふ耳までも能くつなぎ棒を以て打込とも受けこたへ何の事もなし梅木葎原竹生島八ツ橋工風多し(中略)桐などへ上彫かける切羽臺少々細めなり肥後鐺も梅木肉合

五

宜しく是と何れか先といふ事詳かならず年數少しく先を見れば
赤坂のかた元ともいふべし(下略)

六

赤坂鐔 系圖

初代 忠正 庄右衛門 明曆三年歿す
二代 忠正 庄左衛門 延寶五年歿す
三代 正虎 庄左衛門 寶永四年歿す
四代 忠時 彦十郎 保津美氏俗に親彦と唱ふ後に忠宗と銘す
延享三年歿す

同門人

忠重 太左衛門 京橋銀座町住五代忠時京都在留中六代忠時の後見
をなす

忠綱 金太郎 忠重男

忠則 清左衛門 忠重門

七

忠則 清左衛門 忠則男

五代 忠時 彦十郎 俗に中彦と唱ふ物好を以て京都に上り實子幼少に付萬

事忠重に頼置京都に住す故に欠落又は脱走彦十郎と云ふ

明和元年歿す

六代 忠時 彦十郎 前名忠好俗に孫彦と唱ふ寛政八年歿す

七代 忠時 彦十郎 文化二年歿す

八代 忠時 彦十郎 文化年中相續

初代門 市五郎守忠 五右工門忠政

二代門 三郎兵衛忠勝 久左工衛忠春

三代門 次兵衛忠房 甚五郎守勝 長兵衛利正

四代門 七郎兵衛忠人 五郎兵衛忠景

五代門 善右衛門忠利 五郎助正光 重二郎忠一

六代門 庄之助忠治 卯之助忠道 平藏忠則

七代門 要助忠虎 七代門 清藏忠光

八代門 岩次郎 八代門 小之吉 千之助

忠重門 兼次郎忠秀

忠則門 善吉 門吾 伊六 土州の人

赤坂鐺 作込圖様

作込概丸形丸耳にして厚手なり切羽臺は幅狭く上部尖る心あり櫃は兩櫃共に上下狭く左右丸みある心なり(五代以下は切羽臺丸く大になり兩櫃共普通になり肥後鐺に似たるあり鍛目露はるるもの多く透しの釣耳へ中の模様を繋ぎを釣と云ふ)に最も注意せらるに因り實用に適するものなり。

代々の特徴に付秋山先生の説によれば

- 初代の切羽臺は上部尖る
- 二代の切羽臺は太くなる
- 三代の切羽臺は幅廣く圓く見ゆ
- 四代より鐺も薄く氣の利きたる作り込となり半月形の櫃穴

尖りて見ゆ

○五代は鐺の作り四代に似て櫃穴は二三代に同じ

○六代は五代に似て銘も同一なれば五六代見分け難し

○七八代は銘の鑿細く相似たり此區別亦見分け難し

圖様は竹葉、一枚桐、舞鶴、水葵、鴨、落雁、歸雁、來燕、竹に丁子、鯰、柳、鷺、干網、葵に車、二本松、八ツ橋、車に放牛、風竹、斧に菱、雲、芦に月、等其他種々なるものを生透になす鐵色に一種の風あり

現鐺に就きて見るに初二代は云ふに及ばず三代迄は純然たる一家の風あり四代以下は時好に制せられたるか肥後及京大五郎等に似たるあり此一家にては初二三代は別格となし四代及忠重上手なり五代六代之に亞ぐ其他門人中には未見のもの多く評し難し惣じて此一家の鐺は其意匠模様の典雅なる見る人をして趣味

を生ぜしむ優品佳作又少からず嗜好者の多き故なきにあらず。

赤坂鐔 用途

赤坂鐔用途に就き古人が如何なる拵に用ひ相當したるかは故別
役先生劔話録中に左の一節あり参考の爲め茲に出だす。
又夫より追々徳川氏治世と成つては刀の造りも略一定して麻上
下を着して禮服と云ふ時即ち年賀祭禮所謂冠婚葬祭には必ず蠟
鞘角頭掛卷大小揃の透鐔を掛ける事に成つて居た尤も是は大概
武士の通常であつて諸侯となると鐔は必ず無地赤銅の板鐔を用
ゐる是には必ず三所物を付けることになつて居た現に家康公差料
の儘と傳へてゐる若狹正宗の拵を初めとして各諸侯の家に存在
する所の品にして文化文政以前は必ず同一の拵になつて居る此
拵は柄糸も必ず黒と限つて居た右の如き拵の透鐔は肥後又は赤

坂の透を専ら用ちひることになつて居た

以下記する所は秋山先生の寄書なり即全文を掲ぐ

赤坂鐔は初代忠正に始まり八代忠時に及ぶ此間數多の門弟あれ共忠時五人忠重忠則以外總て無銘なれば鐔を見て眞に誰人の作と判別するを得ざるものなり然るに余が生國は天保年中一賀齊田中忠八郎の金工鐔寄に記したる如く之を愛用する人多く士族の家毎に之を藏せざるなき程の流行なりしを以て他藩人士の間に末傳の說の筆記せられたるものも存在したり其一二を言ば

忠正二人は兄弟にして京都の鐔商雁金屋彦兵衛の雇工云々

四代目忠時は彦兵衛の實子保津美彦十郎云々

五代目忠時は京都に歸り幸ありて滞留す云々

六代目忠時は父の不在なりしを以て四代忠時の門人忠重後見す云々

忠重は鍛冶橋門外五郎兵衛町に移住す藩邸の出入に便ならんと爲したるなり云々

されば余の如きも青年時代より先輩に傳説をきき或は實物を示されて教を受けたれば作人を判別する上に於て他の如く困難を感ずる事少なきが如し土佐人の古き押形を見るに赤坂鐔の書き入は金家信家其他の作より一步進みつつありて取るべき物多し依て多年間之をもととし實物を照査し來るに弟子筋の作迄を細別するは至難なれ共初代二代三代は此の如き作風四代六代の作は相似る五代作は三代に似る七代八代は此の如しとをばろげながら鑑別するを得るに至る此赤坂鐔を見るに金工鐔寄其他の著

書耳に深く信頼して實物に相對せむには京尾肥等の地透鐔に就て何等の點より之を區別すべき物なるか殆其道を得ざるを嘆ずなるべし之れ小倉君の著ある所以邪。

茲に猶一言を添附せんと欲す他なし此忠正の出所之れなり抑江戸の産なるか武藏には古き地透物あるなし必然他より移住したる人なるべし果して移住者とすれば何國よりと看認すべきか容易の事にあらず之を解決せんには唯一の道あり類品を見出だす之れなり其類品と目する物は何ぞ尾州の地透鐔なり此尾州鐔に忠正、正虎の作を對比すれば天正、文祿頃の尾州の地透鐔に酷似す乍併細查を逸れば櫃穴形、模様、鐵取等に遠く及ばざる物なれば尾州出とも極め難し余が研究上より偶然此類品を見出だしたるは稻葉通龍の裝劔奇賞を初め其他の著書に見ゆる金山鐔是なり金

山鐔の製造地を山城となしあるを輕信して京都に於て金山鐔と唱へ來る物を數星霜の間に數拾枚を取寄せて研究したるに時代と模様稍相似たる物あれ共大概丸耳に豎縞の如き鍛目露出して金山鐔の特徴たる角耳崩に黒點の出でたる物一枚もなし惟に之織豐時代尾州より金山鐔の轉入し流行したる頃京都の商人の手によつて模造せられたる物即其一部分に赤坂初代作に似て少しく時代古く鐵色黒く見ゆる物あり之れ赤坂の前身にあらざる邪赤坂鐔の創始者を鐔商と假定し寛永の初年江戸に下り赤坂に居を卜し新鐔を製作して販賣する物とせば此場合其人の第一に考究す可きは嗜好に投ずると其販路の二つなるべし寛永初年の江戸は文政天保度の如く未だ隆盛ならず諸國より入る侍も多からざりしは想像に難からず此時彦兵衛の撰みたる尾州型の地透鐔

一八
 は由來徳川家には參尾の古き關係有り金銀象嵌肉彫象嵌物等の
 流行も未だしなれば赤坂鐔の名こそ新なれ其實疾に京都に於て
 製作し來りたる地透鐔の商人の旗下の士を大部分の目的として
 移住したる物なる可し生國の傳説と實物に依つて之を述ぶるも
 のなり

大正十年七月 日

七十八翁

白 賁 記

雁金屋彦兵衛作

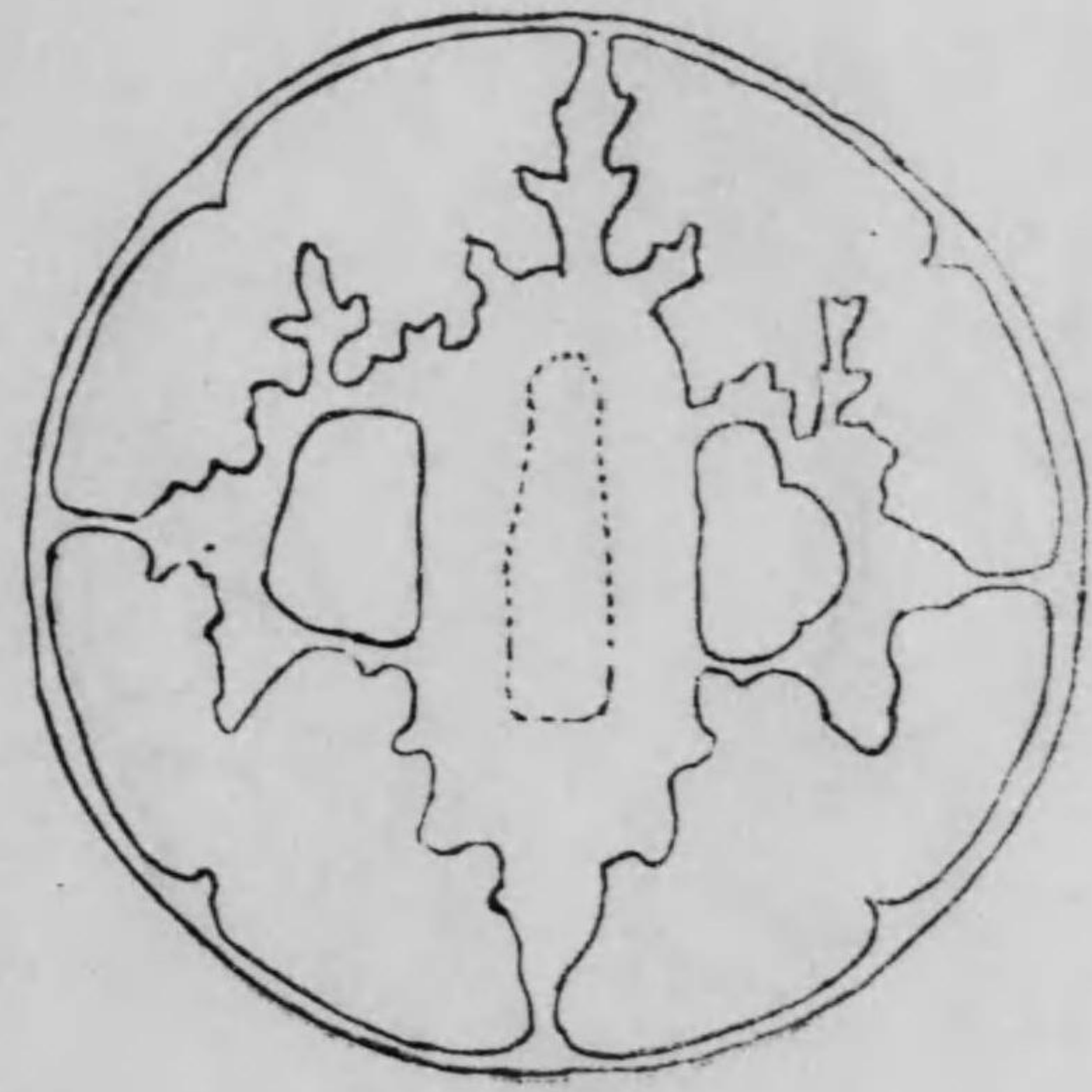


初代 庄右衛門忠正作

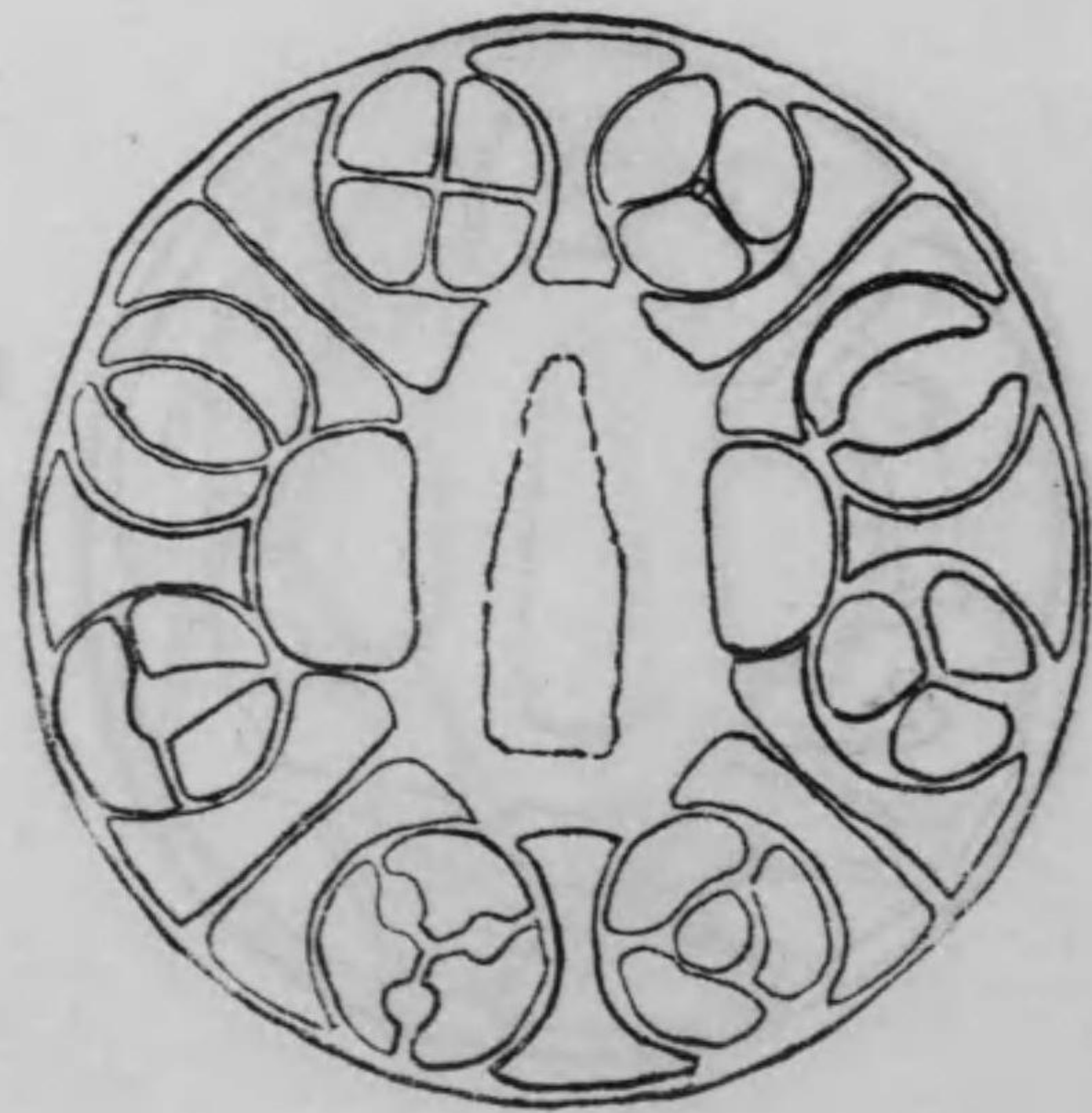




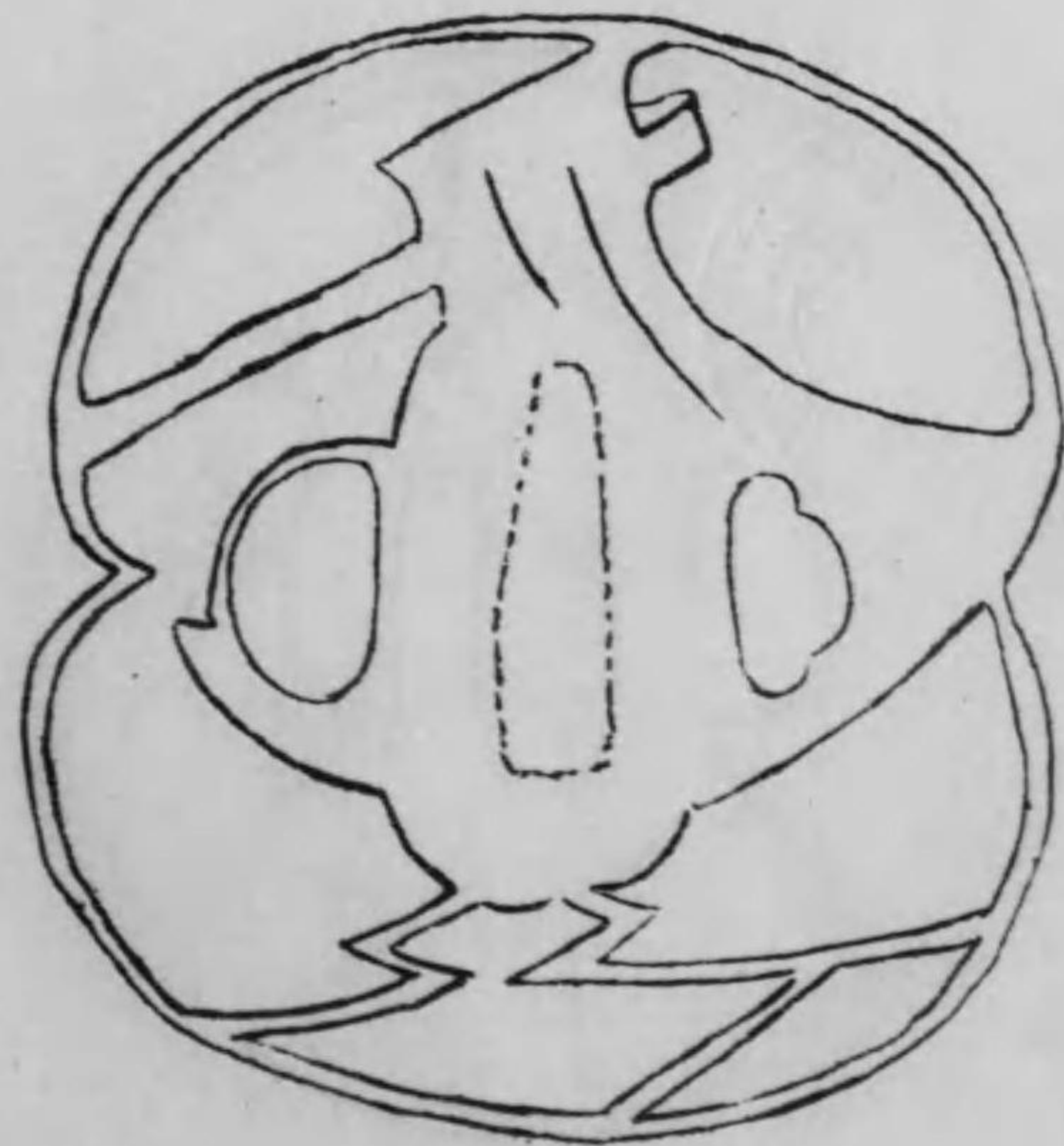
初
代



初
代



初
代



初
代



二代



二代 庄左衛門忠正作



二代

三

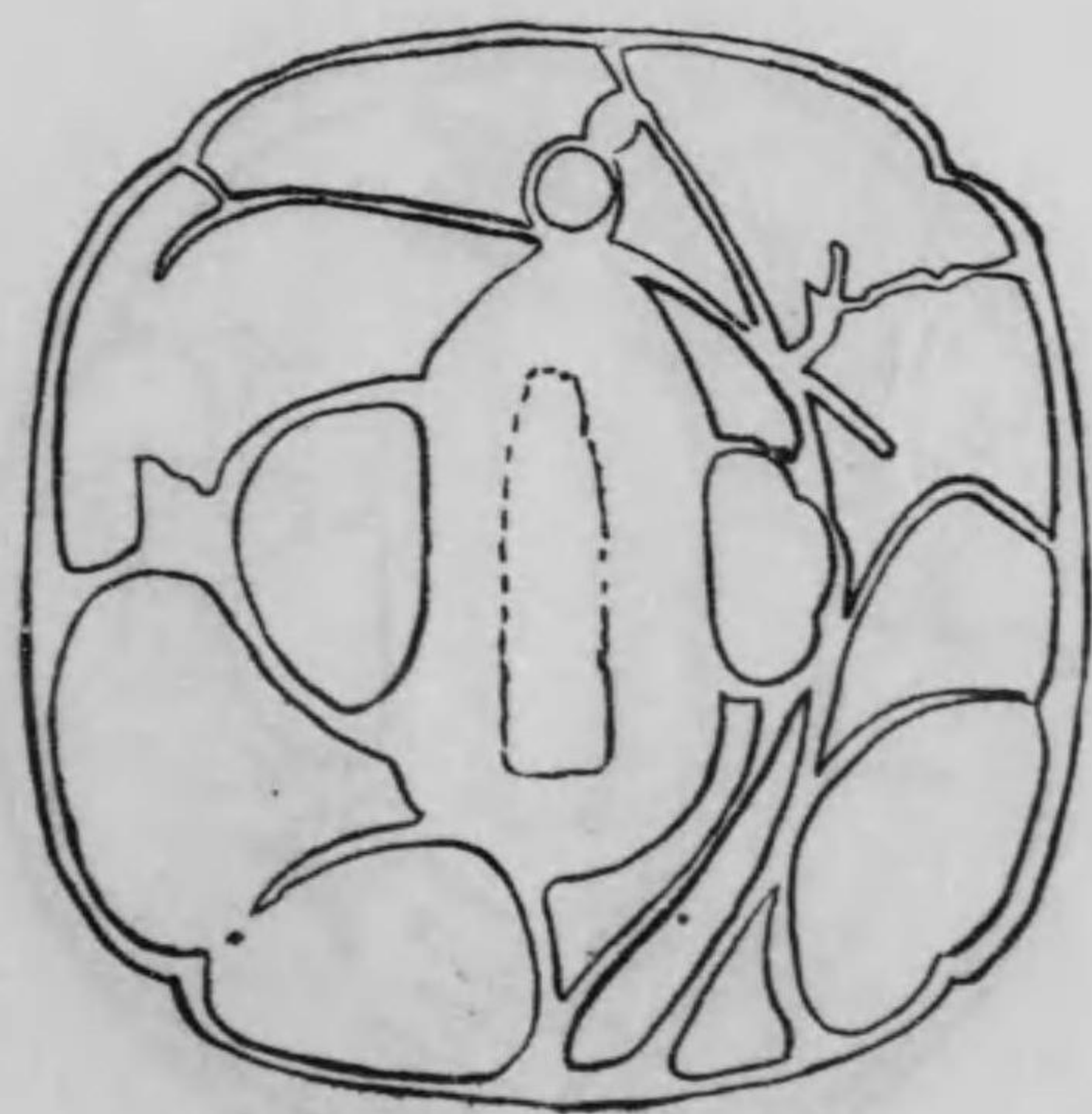


二代

三



二
代



二
代

二四

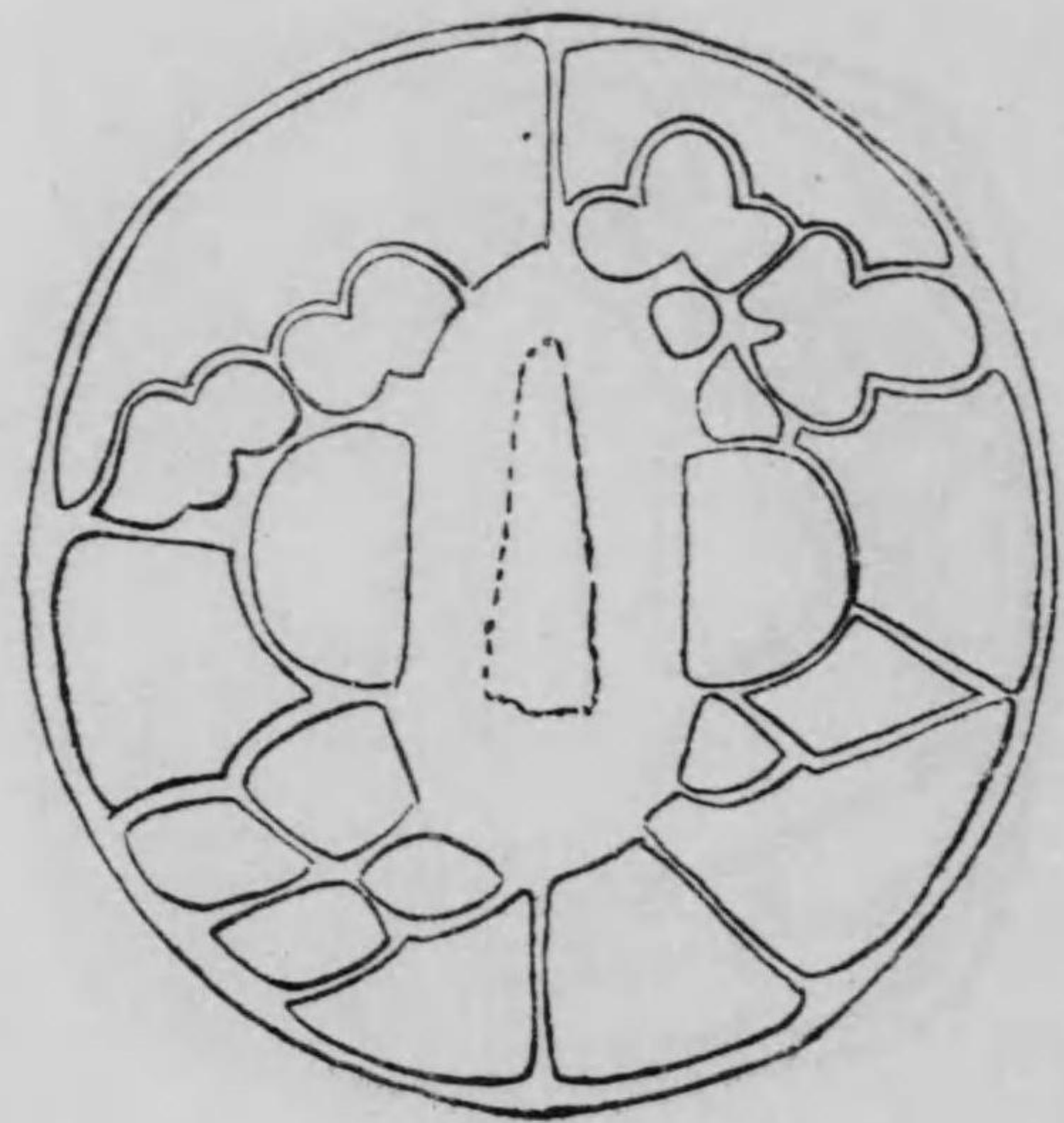
三代
庄左衛門正虎作



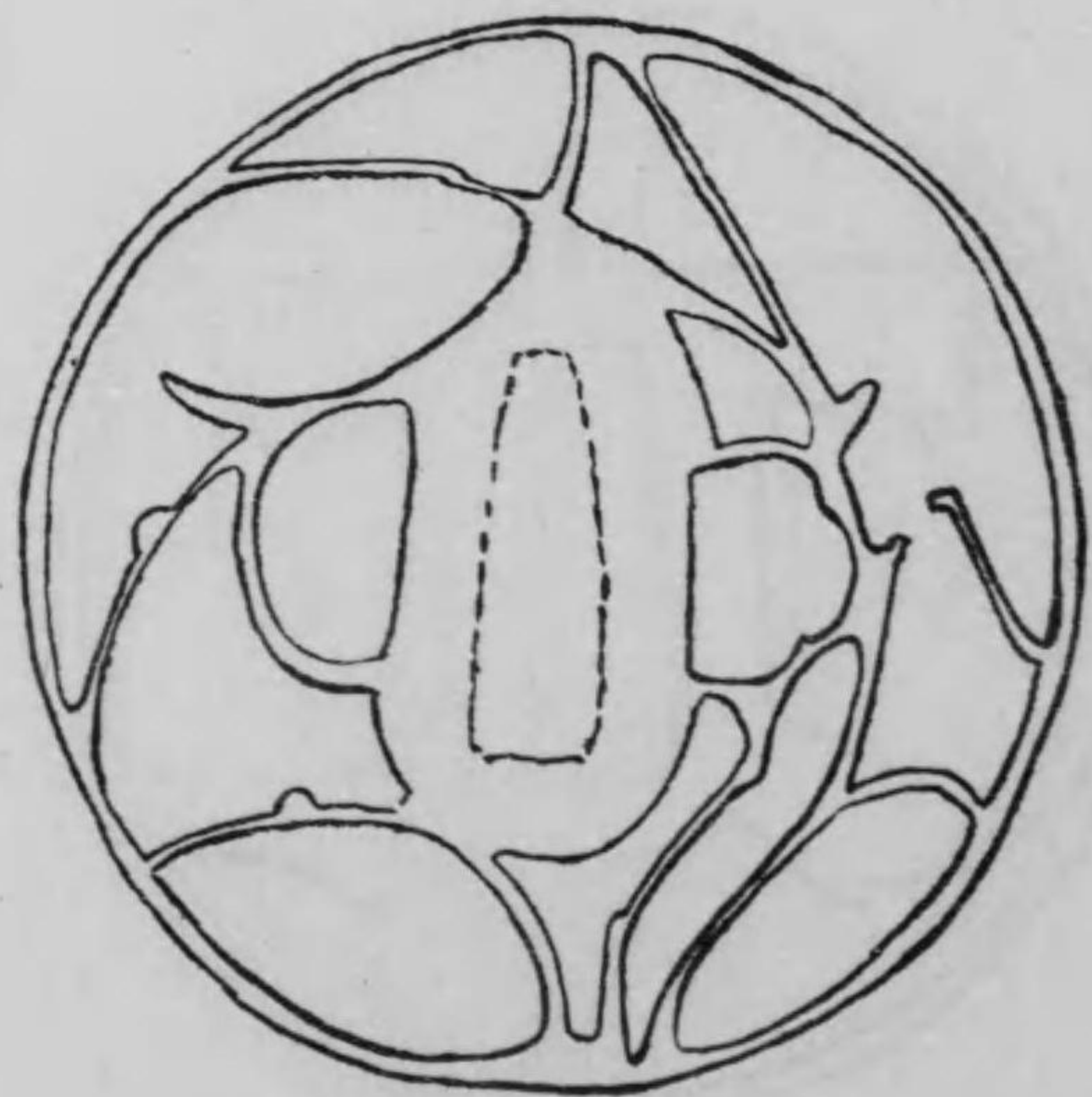
三
代



二五



三
代

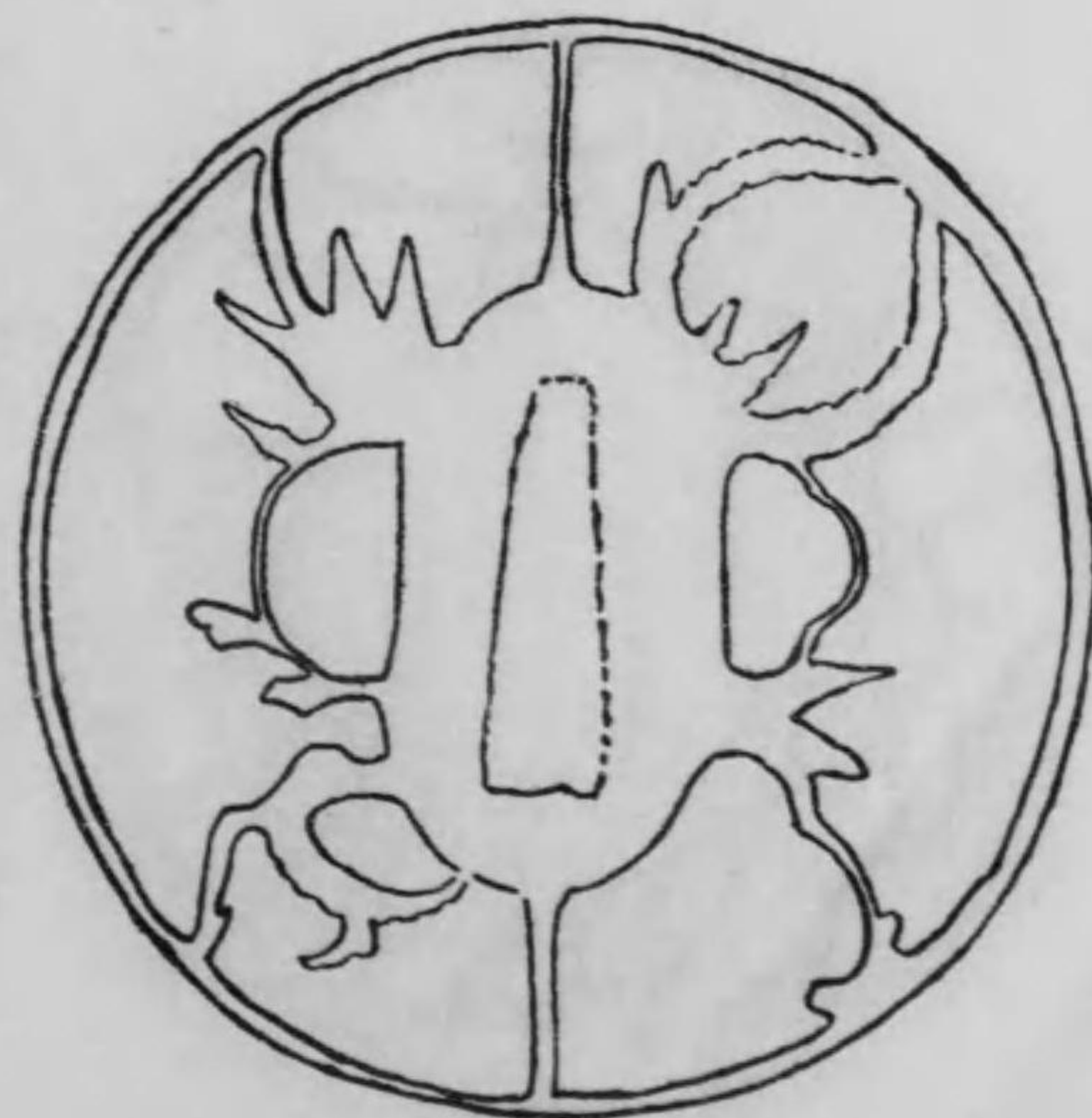


三
代

二
七



三
代

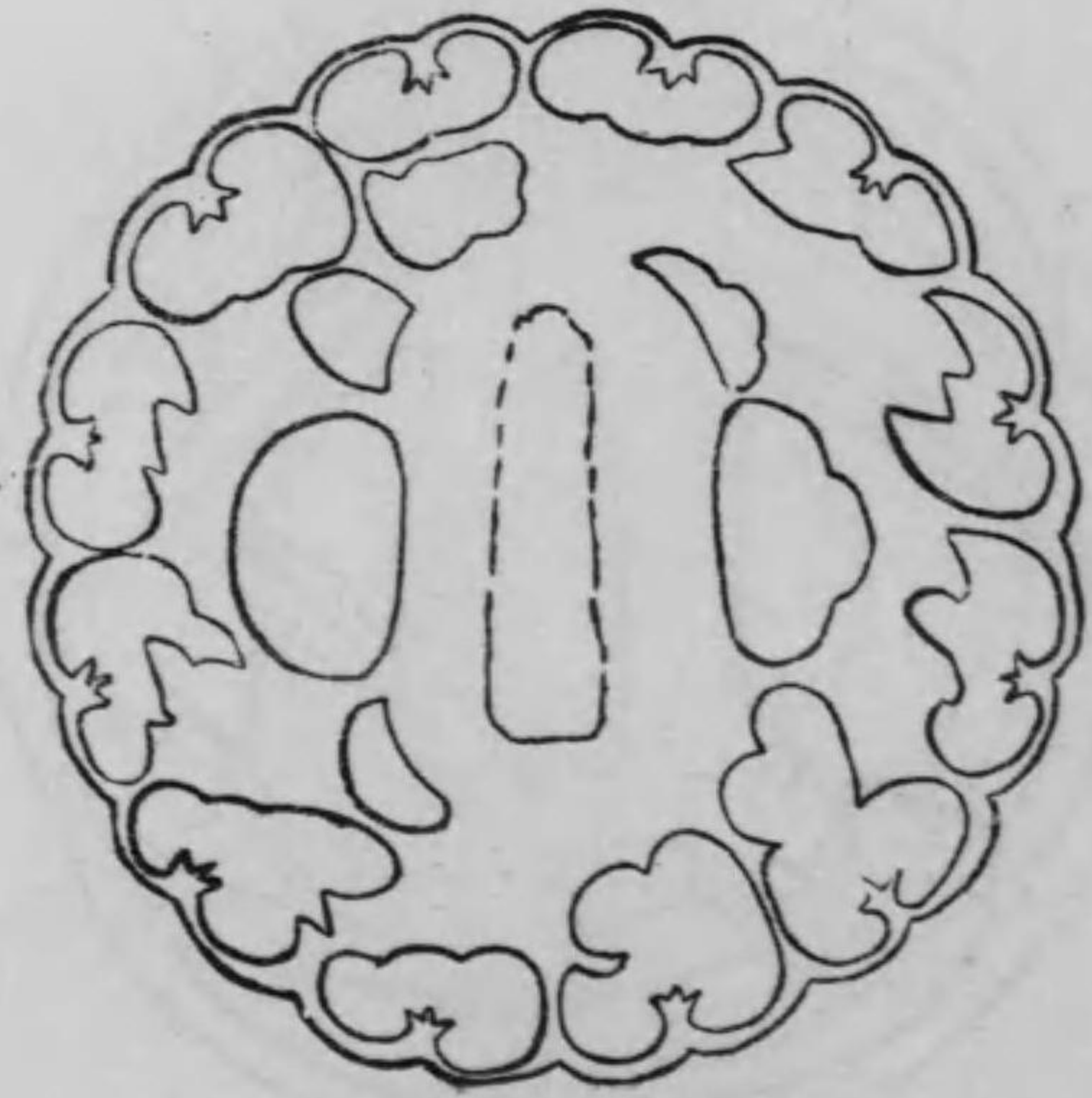


三
代

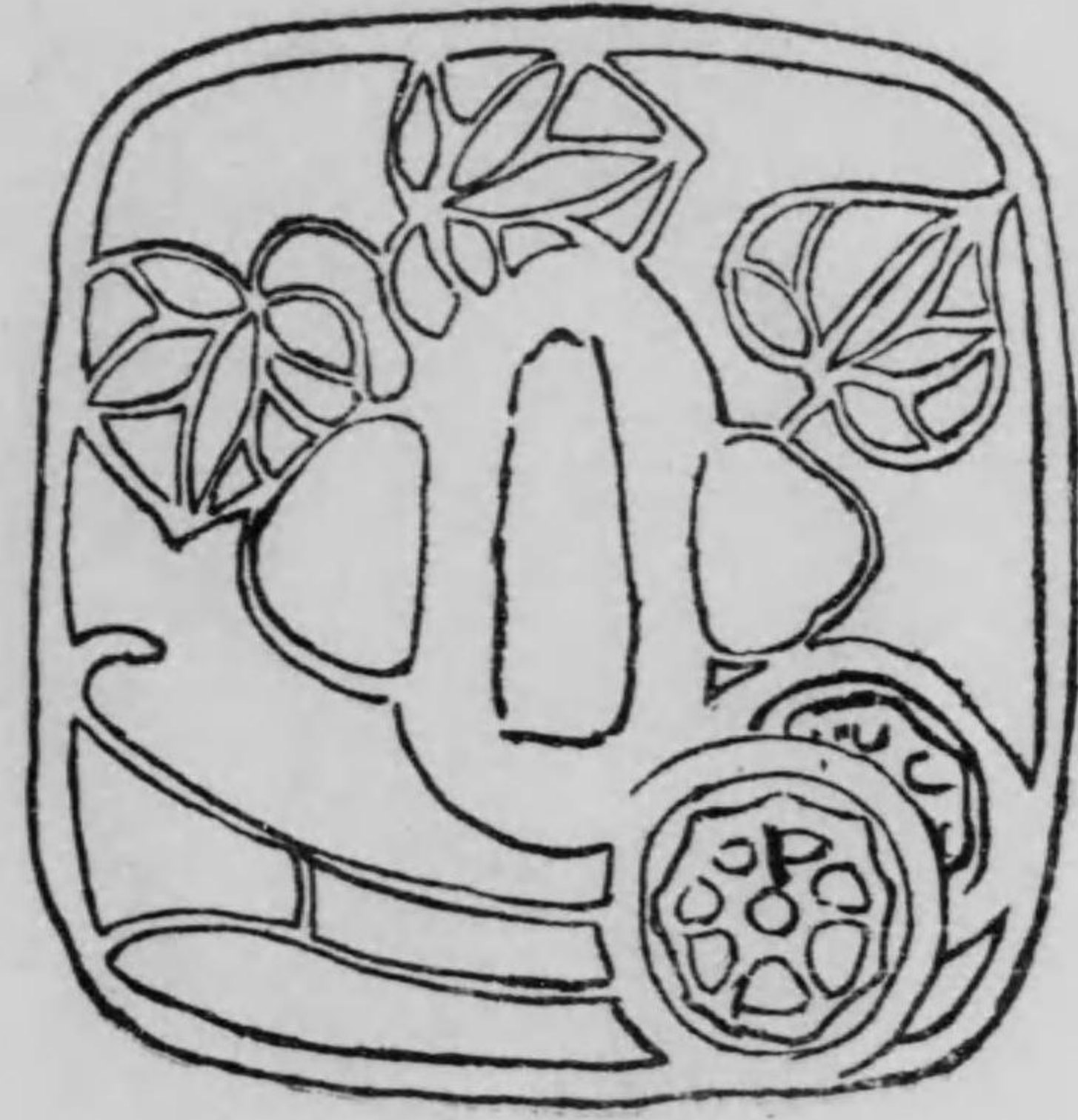
二
六



四
代



四
代

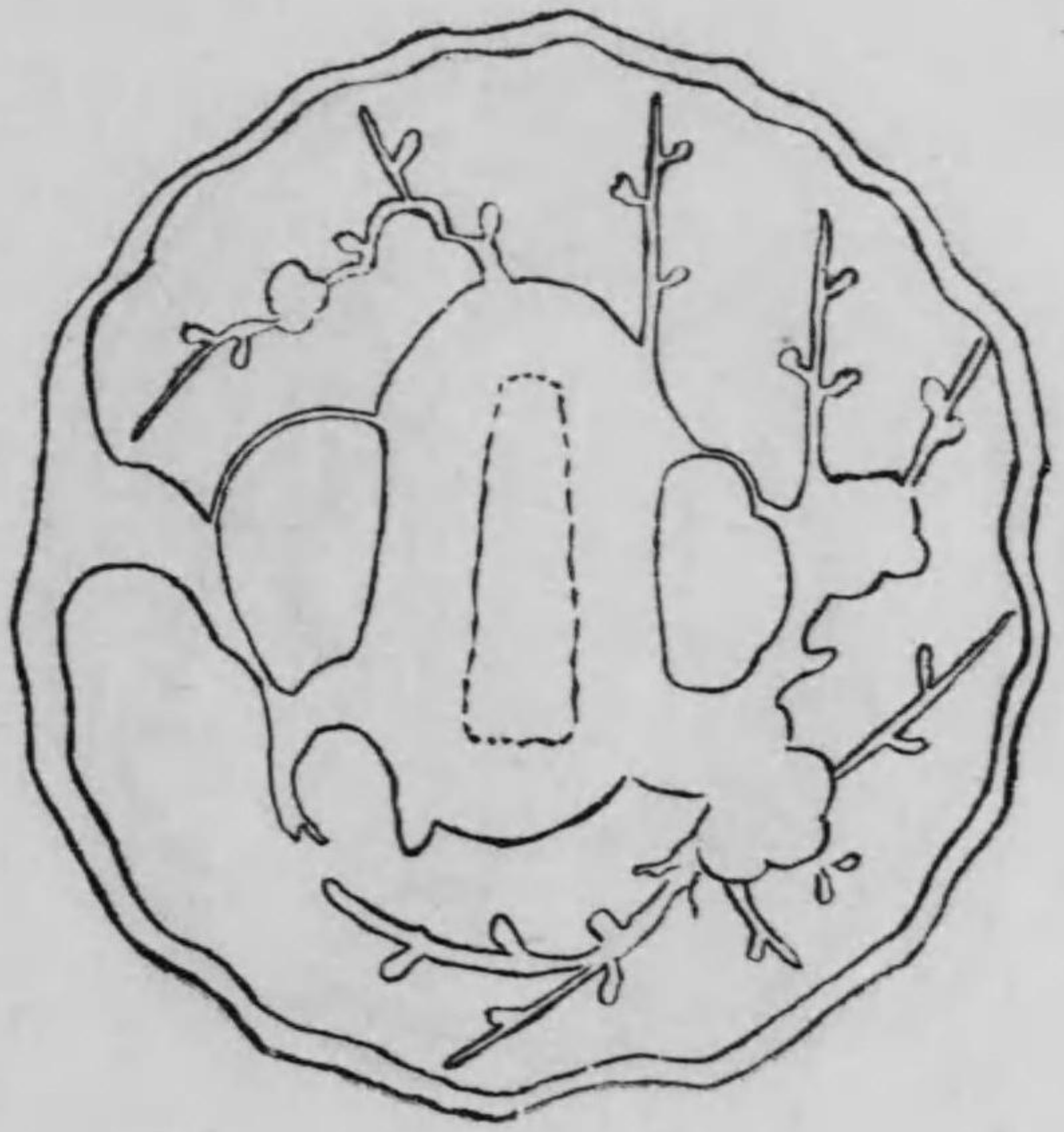


四代 彦十郎忠時作

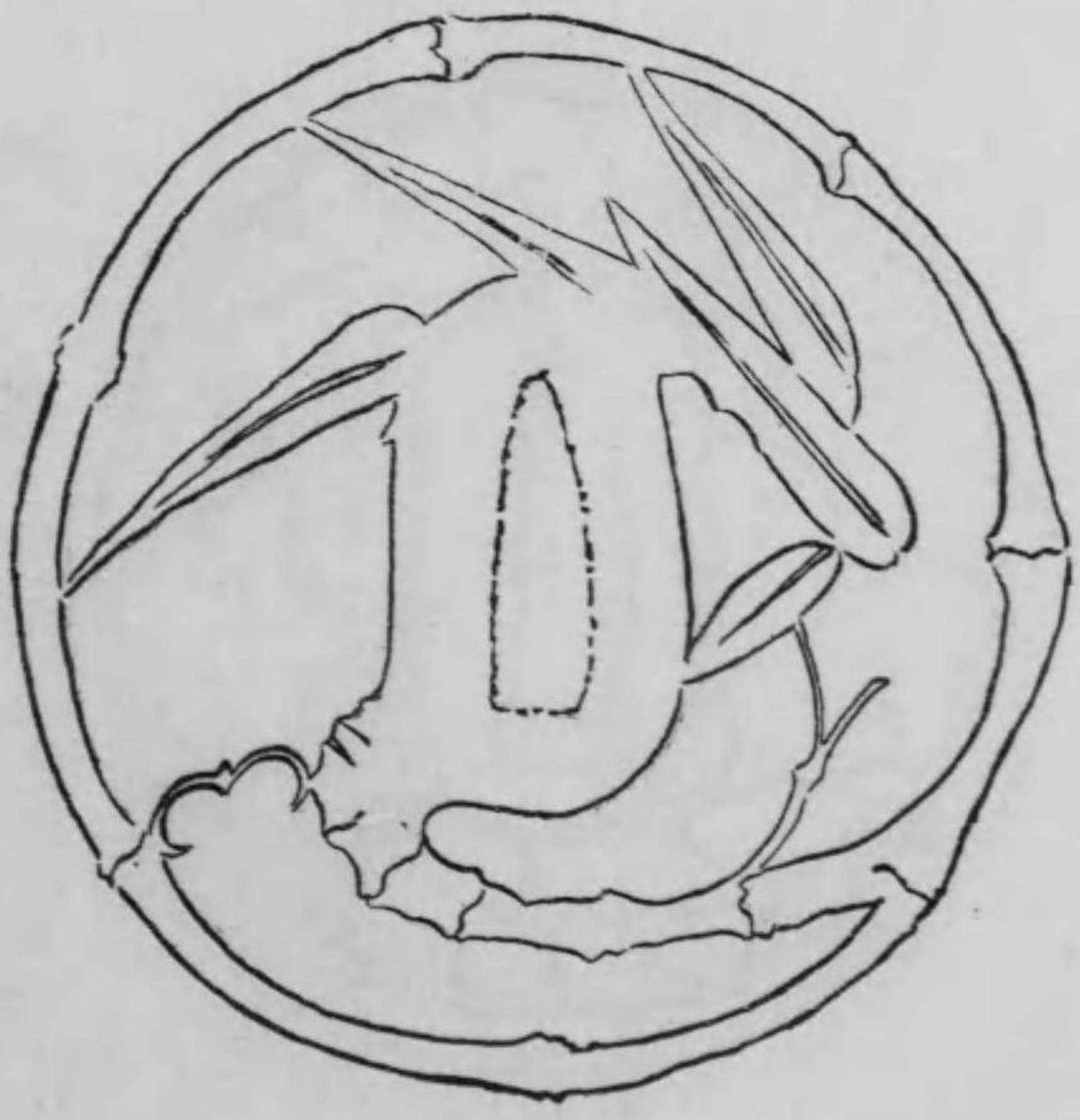


四
代

四代



四代

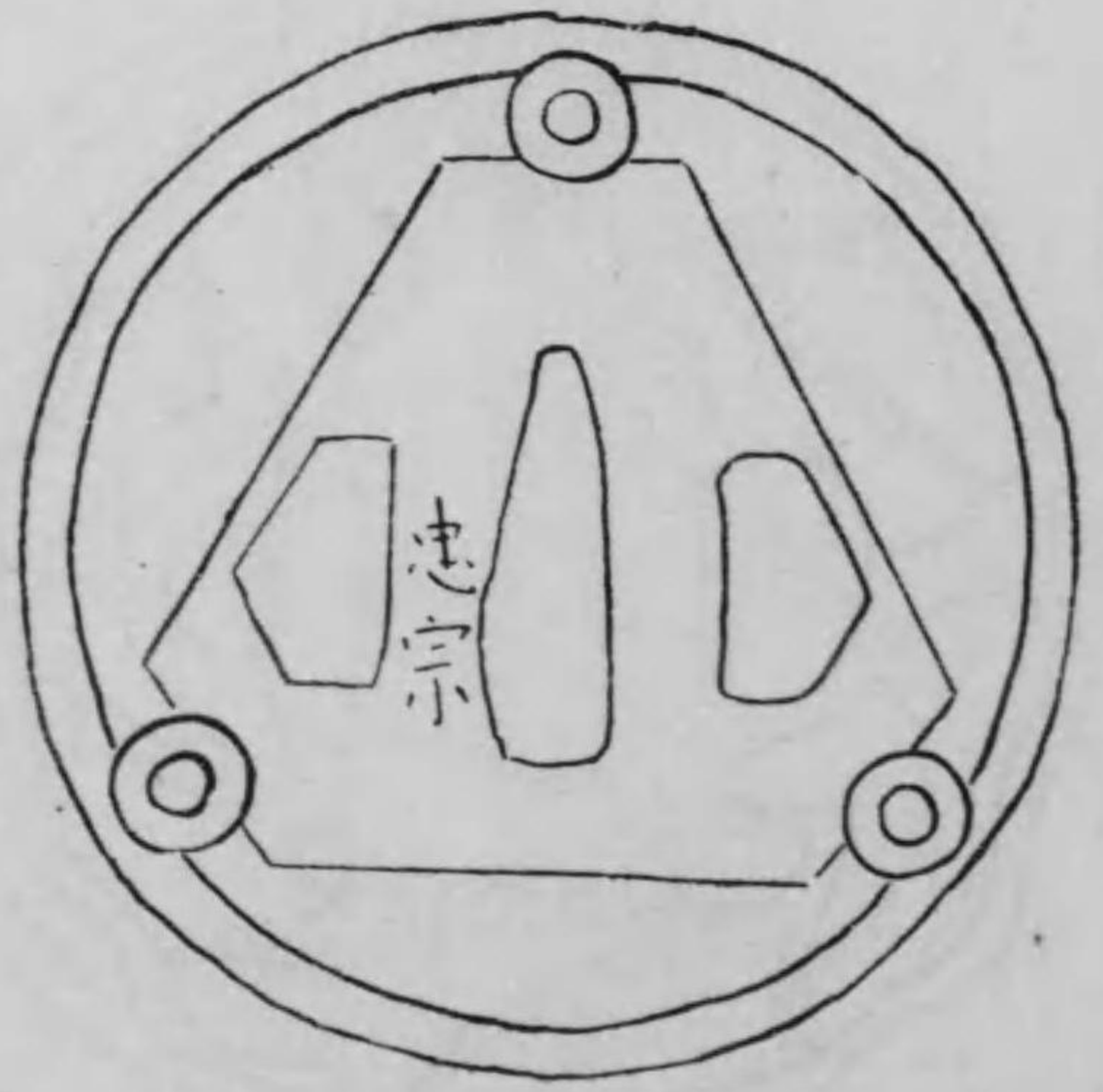


三〇

四代 後銘忠宗作



四代 後銘忠宗作



ウラ 元文五年九月中旬

三一

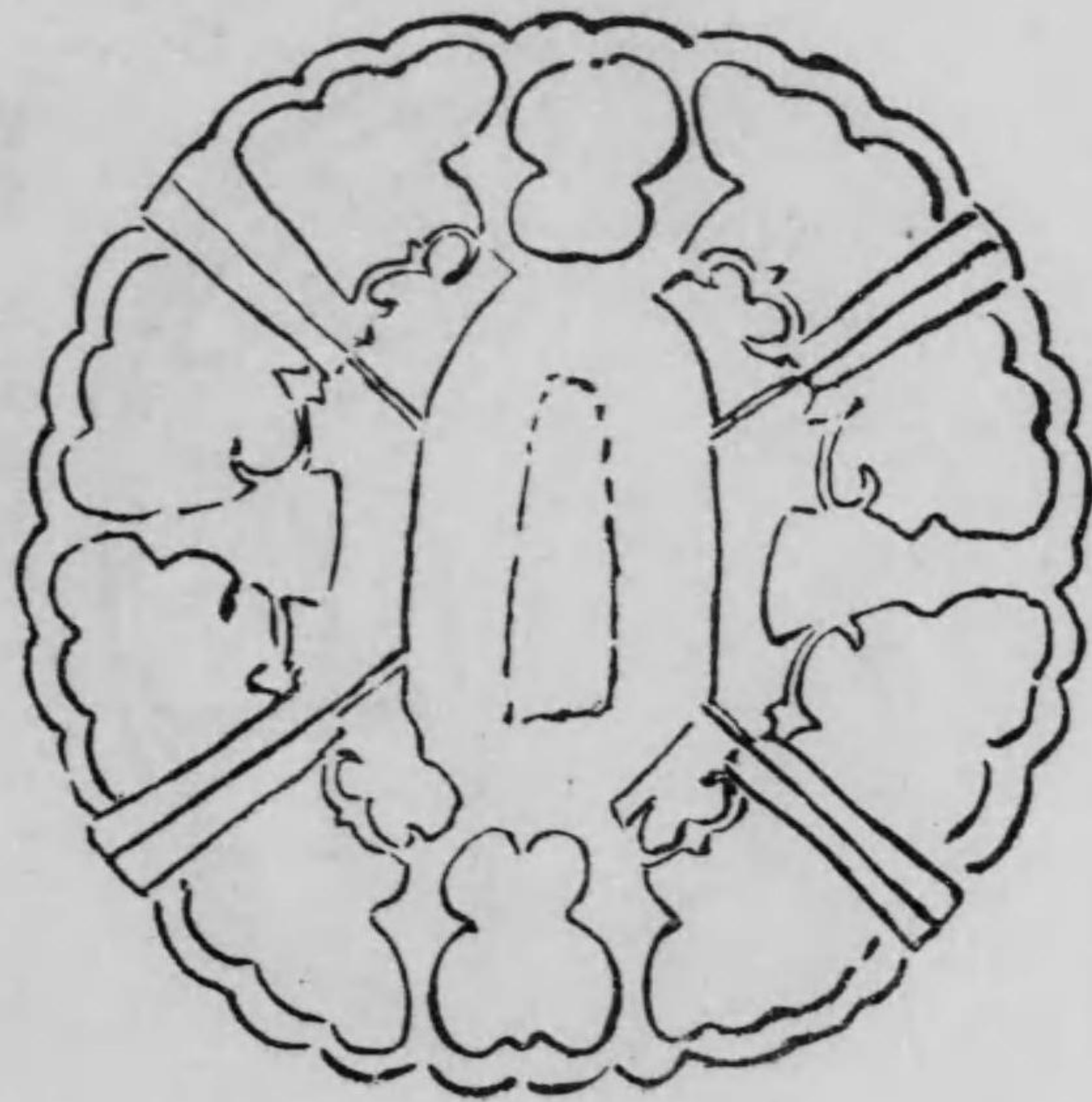


五
代

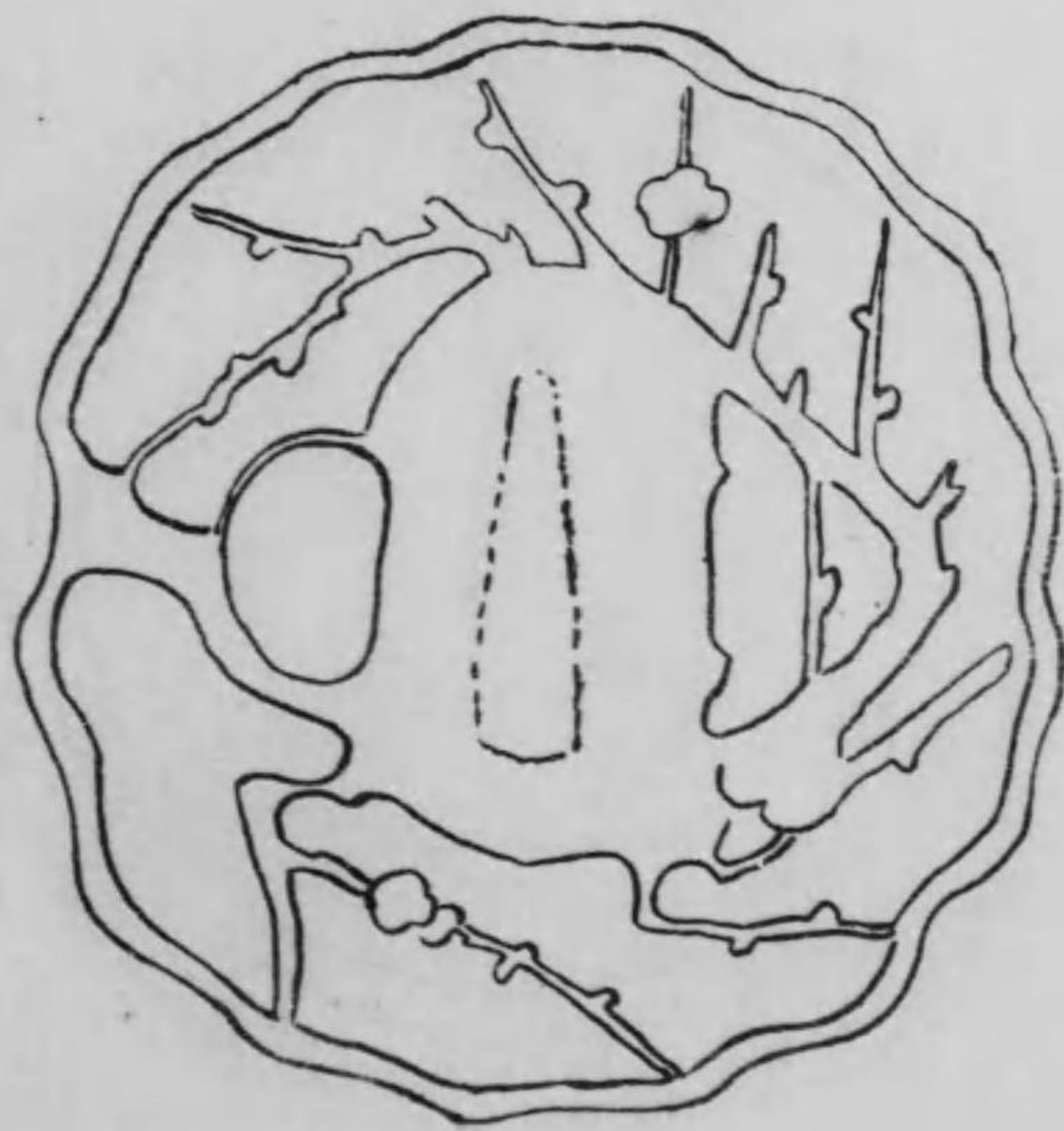


五
代

三



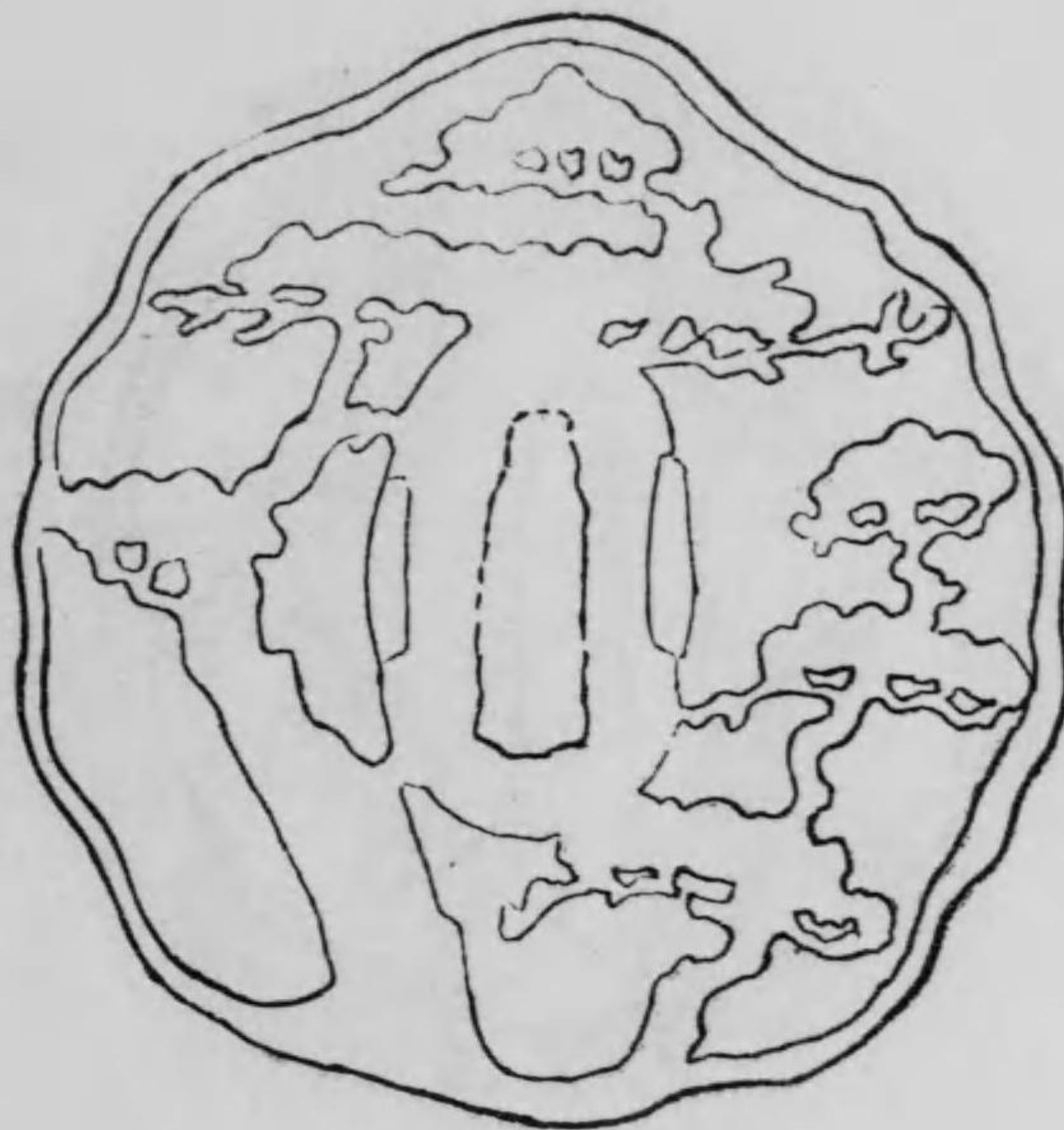
五
代 彦十郎忠時作



五
代

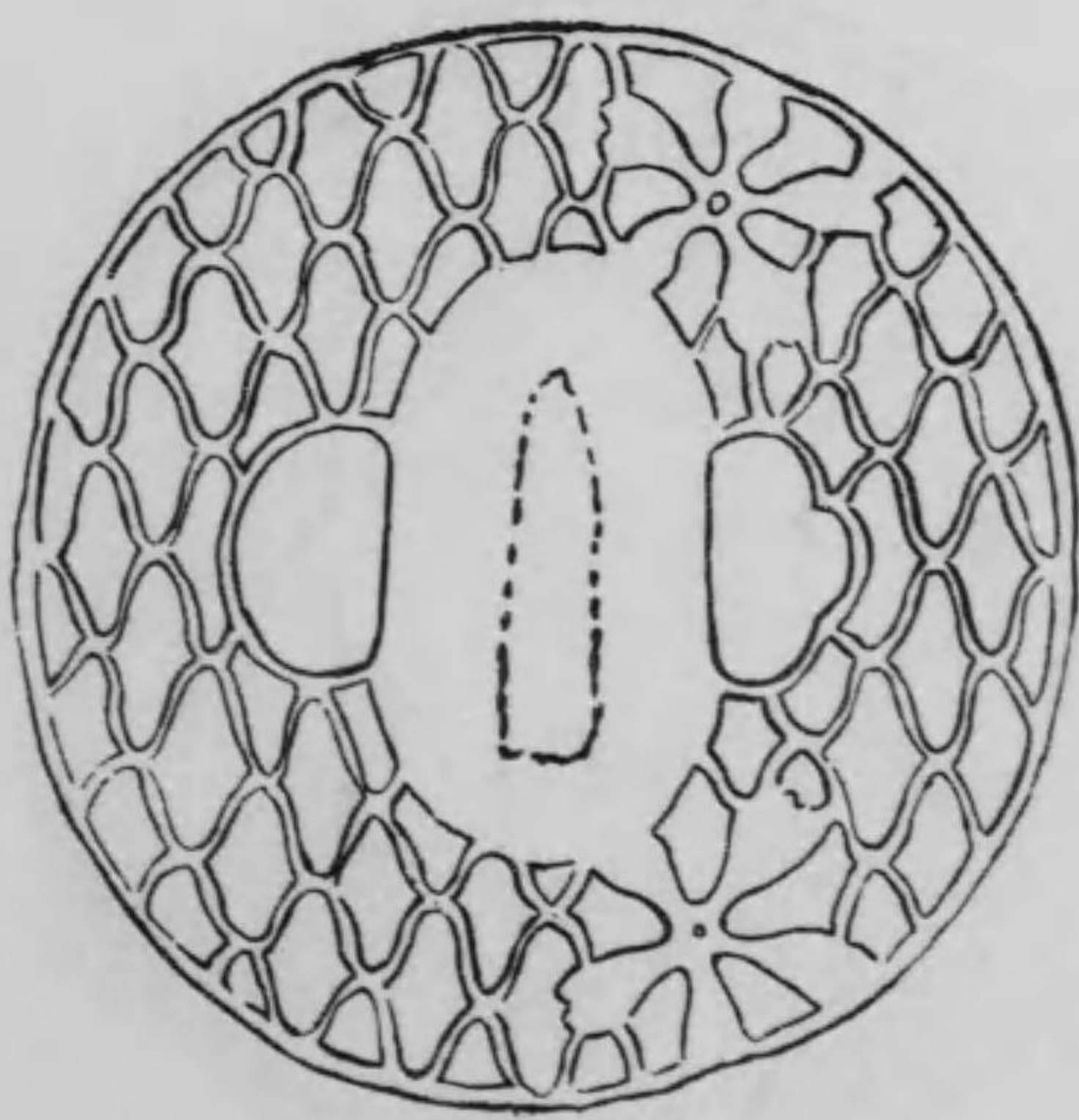
三

六代 彦十郎忠時作



忠時銘入

六代



三四

六代 前銘忠好作

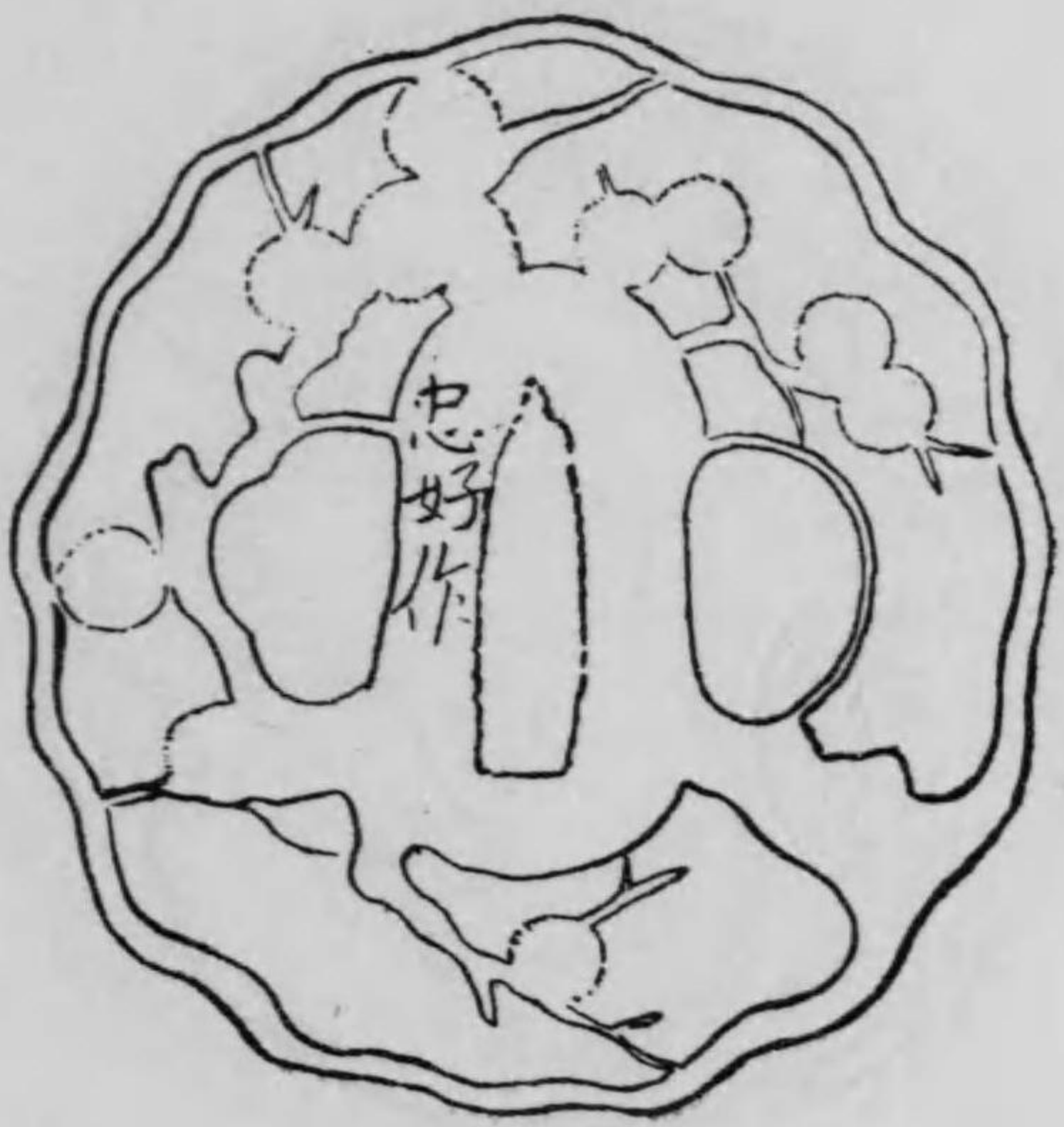


六代 前銘忠好作



三五

六代 前銘忠好作



七代 彦十郎忠時作



三六

七代



八代 彦十郎忠時作



三七



二代門 久左衛門忠春作



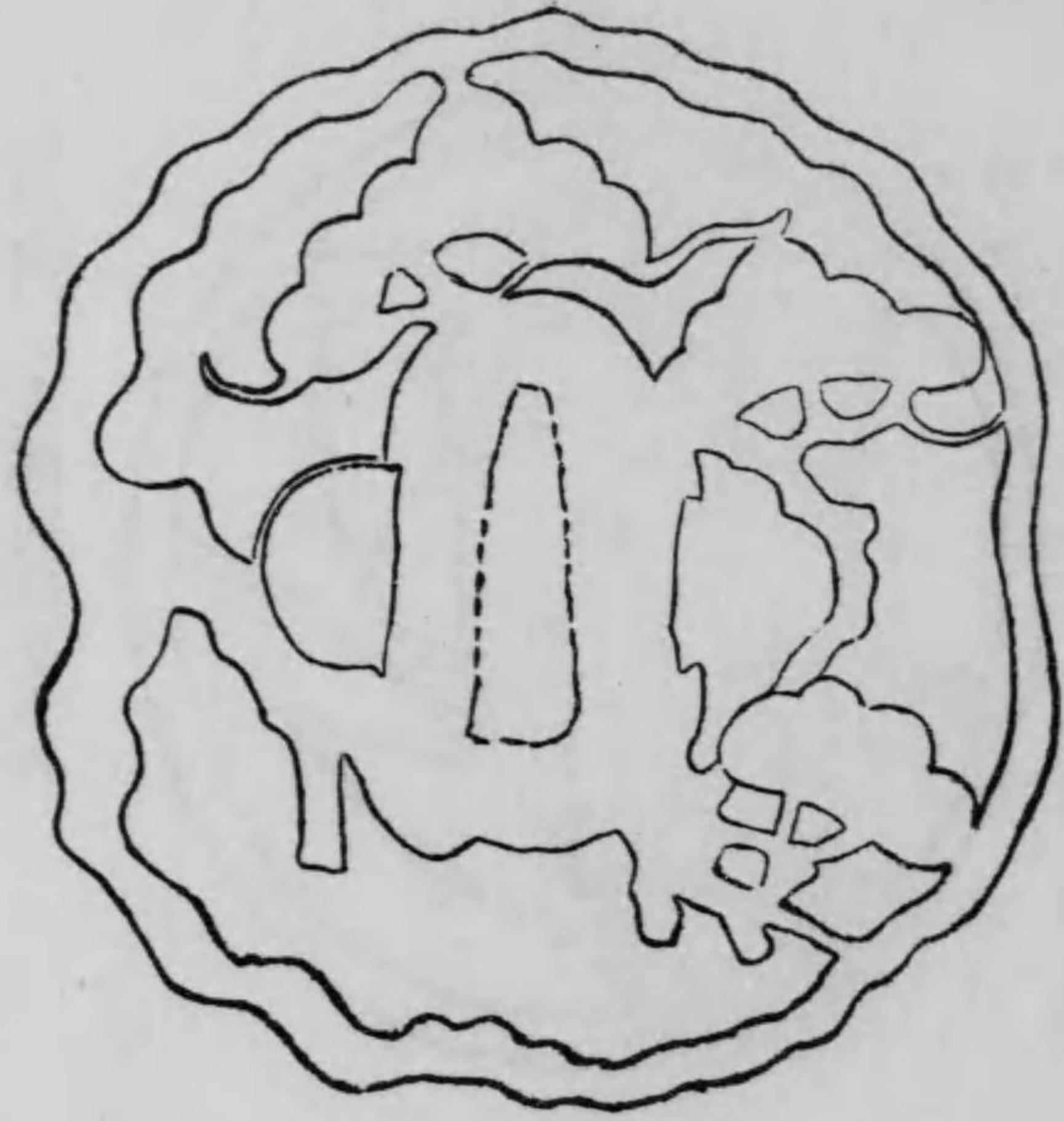
二代門 三郎兵衛忠勝作



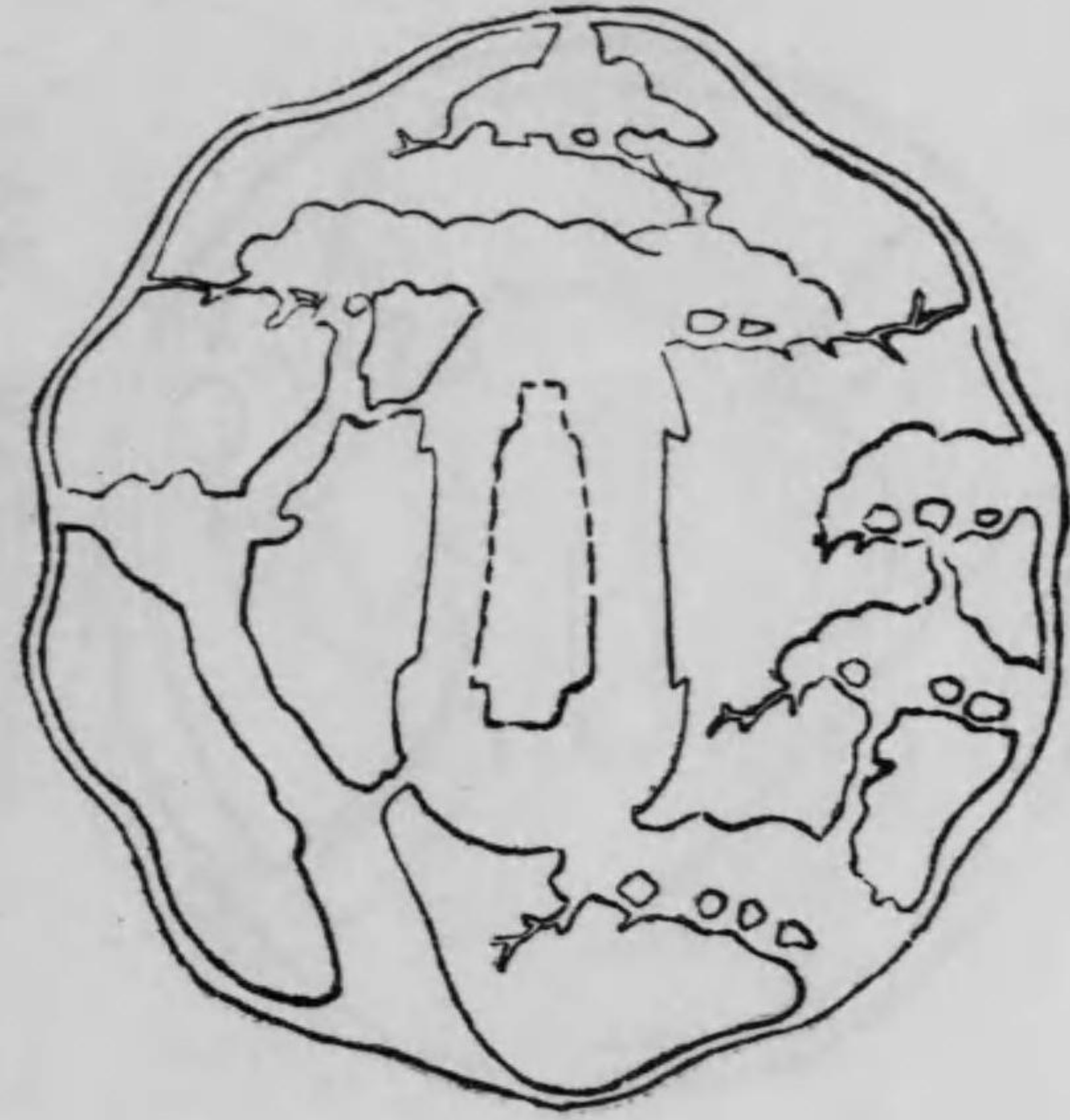
同上



同上



四代門 忠重作

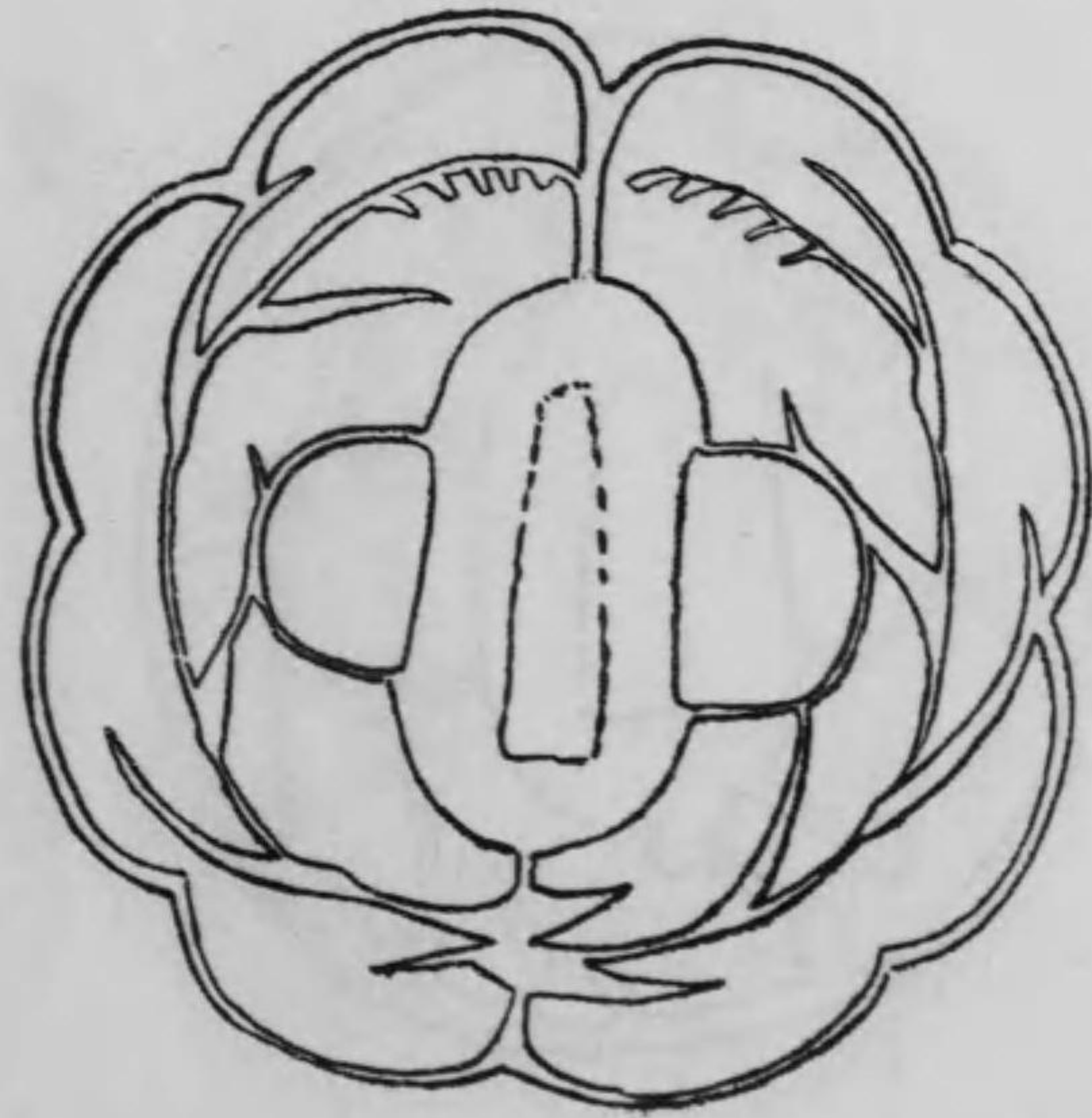


四代門 太左衛門忠重作



同上

四一



同上

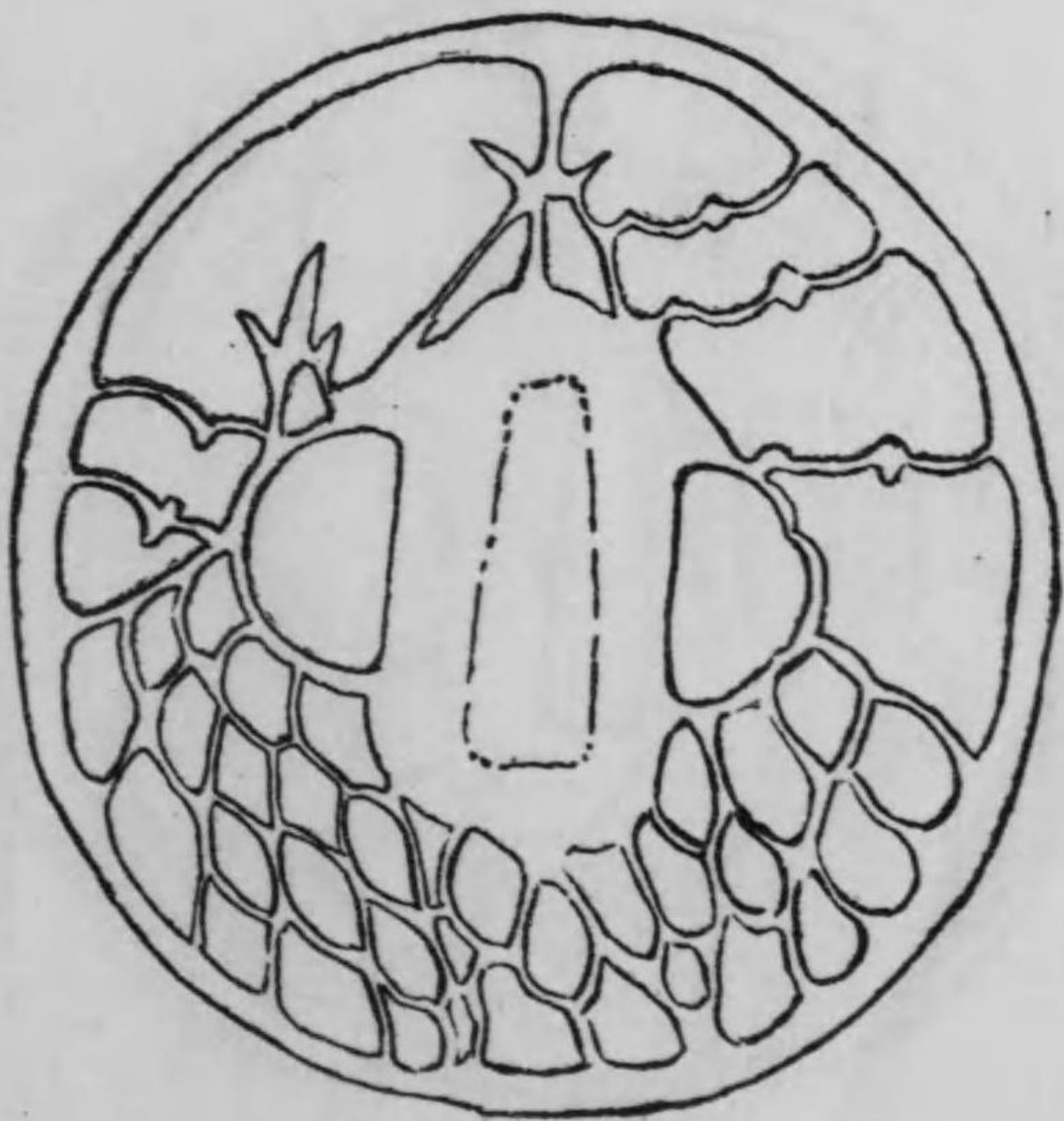
四〇

四代門 七郎兵衛忠人作



附圖終

四代門 五郎兵衛忠景作



四二

大正十年九月一日印刷
大正十年九月五日發行

著作
發行者兼

東京市京橋區木挽町一丁目十五番地
小倉陽吉

印刷者

東京市深川區西森下町三十一番地
香取壽郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目四番地
株式會社錦光堂

11
487

天
地
人
三
才
一
氣
同
歸



明
治
三
十
年



Small, faint text or markings at the bottom of the right page.

終

